佐佐木信綱

記念館だより 第36号

目次

・常設展示の再開
・講演会レポート
・お知らせ
・信綱一首
・収蔵庫から
・学芸員のきまぐれコラム

常設展示の再開

令和元年九月五日から六日未明にかけての豪雨被害により、資料館の展示室が使用できなくなり、約二年半の間、閉室していました。

令和二年二月から展示室の内部修繕・改修工事を開始し、屋根の防水工事を行い、壁紙を新しくしました。令和三年には、空調設備工事と照明のLED化を行いました。

再開を機に、ひとりでも多くの人に信綱の功績を伝え、新たな文化を生み出していく場所としていきます。

■常設展の概要

展示は大きく三章に分け、つぎのように構成しています。

・第一章　信綱の生涯
・第二章　信綱の功績　歌人として　学者として　作詞者として
・第三章　文豪との交流
　＋
・『心の花』の歌人たちのコーナー

・第一章　信綱の生涯

明治五年(一八七二)、鈴鹿市石薬師に誕生してから、松阪、東京への転居を経て、静岡県熱海市凌寒荘で永眠するまで、転機となった出来事や刊行物をとおして、時系列で展示しています。

・第二章　信綱の功績

「歌人として」では、歌道を世に広めることとなった、竹柏会の機関誌『心の花』の創刊号や記念号を展示しています。創刊したのは、明治三十一年(一八九八)で、現在刊行されている短歌雑誌の中で、最長の歴史を誇っています。

また、第一歌集の『思草』(明治三十六年)から最後の歌集となった『山と水と』(昭和二十六年)までの全歌集を展示しています。

「学者として」では、国文学者として、万葉集の研究に大きな成果をもたらした『校本万葉集』の洋装本・和装本を展示し、刊行に至るまでの出来事を紹介しています。現存する日本最古の歌集である万葉集は、原本が残されていないため、平安時代以降に作成された写本によって伝えられてきました。失われた原本を復元するために、信綱が中心となって、写本を捜し出し、当時見ることができた写本のすべてを付き合わせ、それらの写本同士の違いを一覧できるようにまとめた『校本万葉集』の刊行に尽力しました。

「作詞者として」では、代表歌である「夏は来ぬ」の信綱自筆色紙を展示しています。

・第三章　文豪との交流

島崎藤村、森林太郎(鴎外)が、信綱に宛てた直筆の葉書などを紹介しています。

・『心の花』の歌人たちコーナー

短歌雑誌『心の花』は、**ひろく・ふかく・おのがじしに**をモットーに結成された短歌結社・竹柏会をもとに、個性豊かな歌人を、世に多く送り出しました。その中から、石榑千亦、川田順、木下利玄、九条武子、五島茂、前川佐美雄、斎藤史らの歌集を展示しています。

佐佐木信綱の名前は知っているけれど…という方にも分かりやすい展示です。ぜひご来館ください。

展示室内観

学芸員の気まぐれコラム

願はくはわれ春風に身をなして
憂ある人の門をとはばや

願いが叶うなら、私はかろやかな春風となって、心配事を抱いている人の家に訪れて、話をきいてあげたい。

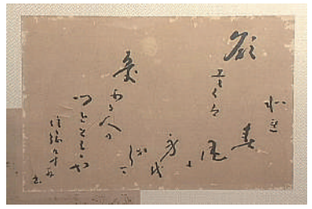
この歌は、竹柏会の結成を記念する第一回竹柏会大会の席上で発表された歌です。当日の※1兼題は「春風」で、第一歌集『思草』に収録されたことで広く知られることとなった代表歌です。

この歌が書かれた衝立が、資料館に隣接している信綱生家にあります。平成二〇年に、石薬師小学校よりご寄贈いただいたもので、信綱が九〇歳の時に書かれた自筆の懐紙が貼られた衝立です。それまでは、同校の正面玄関に置かれていました。明治三十二年(当時二十八歳)に詠んだこの歌は、晩年を過ごした熱海凌寒荘の玄関脇の銘版にも刻まれており、信綱にとって、生涯特別な歌だったことがわかります。

信綱の※2自注には、**《人の心の深く秘められた憂問を聞けることは、歌道の徳のひとつであるという当時の信念からうたったものである。》**と書かれています。

決起の歌にしては、柔らかな印象を受けていたのですが、自注を読んでみると、竹柏会の主宰として、メンバーを引っ張っていかなければならない強い信念が読み取れます。また「春風」には、「春に吹くあたらしい風」と「春になると毎年吹く風」という二つの意味が込められていると感じられ、信綱が、歌人として生きていく覚悟を、自分自身に向けた誓いの歌だったのかも知れません。

※1兼題…和歌、俳句の会などで、題をあらかじめ出しておいて作るもの。
※2自注…自分の書いた本に自分で加えた注釈。



参考文献　佐佐木幸綱著『佐佐木信綱』桜楓社、一九八二年

ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学者である佐佐木信綱(1872~1963)の遺功を称えるべく、昭和45年(1970)に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年(1986)に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を展示するほか、市内外への魅力発信に努めています。

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町1707-3　TEL&FAX 059-374-3140

開館時間　9:00~16:30
休 館 日　毎週月曜、第3火曜(休日の場合は開館、翌日休館)
　　年末年始
アクセス　近鉄鈴鹿市駅からC-バス乗車
　　佐佐木信綱記念館下車徒歩2分
　　東名阪自動車道
　　鈴鹿ICから車で約20分

資料館

〈記念館からのお願い〉ご来館の際は、マスク着用の上、手指消毒・検温など、館内での感染対策にご協力ください。

発　行
鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課(鈴鹿市神戸一丁目18-18)
TEL 059-382-9031　FAX 059-382-9071　HP 鈴鹿市文化財ガイド http://suzuka-bunka.jp/

講演会レポート

令和三年十一月二十日に、鈴鹿市文化会館さつきプラザにおいて講演会が開催されました。佐佐木信綱顕彰会様の主催による「信綱祭」の一環として、関連講話がありましたのでご紹介します。

講演会の様子

■当日の演題

・「信綱と松阪」（吉田悦之・本居宣長記念館名誉館長）
・「近年の佐佐木信綱記念館特別展を振り返って」（鈴鹿市文化財課職員）

本居宣長記念館名誉館長である吉田氏の講演では、信綱が六才から十一才の少年時代に過ごした町・松阪時代に住んでいた場所（平生町、櫛屋町）を、当時の松阪市内の地図を用いて、参加者と一緒に確認しました。

信綱が八歳の頃のエピソードとして、日曜日ごとに、父・弘綱を訪ねて稽古にくる人と一緒に、※歌ぐさりに参加していたことを挙げ、歌人や国文学者として第一歩を踏み出したのは松阪の地であり、学問への意識を高めるきっかけとして、本居宣長の学問があったのではないかと語られました。

また、新資料の発掘や、分散していく本居宣長資料をなんとか守ろうとしたと述べられ、信綱が本居宣長研究に果たした役割についても講演されました。

※歌ぐさり
父・弘綱が、足代弘訓が開いた寛居塾に在席していた頃、古歌を記憶するために、先生（足代弘訓）が塾生にまじって行った古歌のしりとりのことで、信綱の著書から、弘綱もそれにならって門下生と歌ぐさりを行っていたと書かれています。
《たとえば、先生がまず、「いざこども早く日本へ大伴のみつの松原待ちこひぬらむ」とおっしゃると、四句の「み」が上にある歌を考えて、次にすわっておる一人が、「水の面に照る月なみをかぞふればこよいぞ秋の最中なりける」という。次の人がいえないとお辞儀をする。（中略）こうして一同が古歌をおぼえたとのこと。百人一首のはなるべくいわぬ、同じ歌を同じ日に二度いわぬとの定めであったという。その歌ぐさりを、自分らもしたのである。自分は幸にはやく古歌の暗読を授けられていたので、しあわせであった。》（『作家八十二年』明治十二年、八歳より）

お知らせ

■「佐佐木信綱記念館だより」のバックナンバー公開

「佐佐木信綱記念館だより」は、平成三年に「佐佐木信綱資料館だより」として創刊してから現在に至るまで、毎年発行してきました。バックナンバーを公開しましたので、ぜひご活用ください。

「鈴鹿市文化財課ホームページ＞鈴鹿市文化財ガイド＞佐佐木信綱記念館」より、閲覧・ダウンロードできます。
(http://suzuka-bunka.jp/sasaki/)

信綱一首 36

鳥の声
水のひびきに夜はあけて
神代に似たり山中の村

明治三十六年作　歌集『思草』の巻頭歌

「帝国文学」（明治36・9）に発表されたこの歌は、明治三十六年四月下旬、甲府での歌会に招かれた信綱は、雨の中、昇仙峡をのぼり、御岳に近い山村の旅荘に没宿する。この小旅行については、信綱を含めて三人連れで、そのうちの一人・小尾保彰が「峡中記上・中・下」を「心の花」明治36・6、7、8）に書いているのである程度まで詳しく分かる。これによれば、作中の「水のひびき」は、岩清水を流す筧の音ということになる。旅行詠だが、ファンタジックな一首の清澄な世界が気に入って、信綱は巻頭に於いたのだろう。『思草』一巻の指向するところは、一言でいえば清澄さであるからだ。季節は春、時間は夜明け、これも巻頭歌に据えられた理由だろう。（佐佐木幸綱著、『佐佐木信綱』桜楓社、一九八二年）
※山梨県の昇仙峡の奥にある金桜神社には、二〇一八年に『心の花』百二十周年を記念してこの歌の歌碑が建立されています。

収蔵庫から

今年度は、収蔵品の写真のデータ化を開始しましたので、その中から一点紹介します。

明治時代初期の入学式は、イギリスやドイツにならって九月が主流だったため、卒業式は七月でした。

写真は、明治四十五年七月十日、東京帝国大学卒業式の写真で、東大行幸の説明役を果たした日の写真です。この日のことについて『作歌八十二年』（毎日新聞社刊）に詳細が記されていますので引用します。

《東京帝国大学の卒業式に、明治三十三年以来、毎年行幸があり、式場に臨まされる前に、陳列室において各文科大学の研究を天覧に供するのが例であった。今年は、文科大学では史学より一つと、前々年に元暦校本万葉集が発見されたので、それと、中山家の類聚古集、原家の藍紙本万葉集と、万葉学上貴重な三種を天覧に供し、そのご説明を自分にとの事であった。自分は恐懼したが、言上のためのノートを作成し、これまで着なかったフロックコートを新調して、光栄の日を待っておった。》とあり、とても意気込んでいたことがわかります。

陛下に直接説明をする場合は官位が必要なため、信綱には説明の資格がありませんでしたが、長年講義を継続している講師であれば、大学で説明するのであれば問題ないと判断され、当日は、三種類のうち※1芳賀矢一教授が二つ、信綱が一つを説明し、万葉研究の成果を披露することとなりました。

行幸の当日、

《七月十日、一天開朗な午前十時、正門のうちで車駕をお迎えし、法文科の建物の階上の中央なる陳列室にお待ち申し上げていると、浜尾総長の御先導で臨御、伊東忠太教授の祇園精舎図及アンコル・ワット、鯨井恒太朗助教授の無線電話、黒板勝美助教授の花園天皇宸記、次に自分らの万葉集、最後に、中村清二教授の偏光を用いて実験する装置の順に、熱心に御聴聞あらせられ、御熟覧になった。》

この日の感激をうたった歌があります。

> いそのかみ古き歌巻あらたしき
> 光ににほふ大御目に触れ

他の著書にも、次のように喜びが記されています。

《自分の生涯にとって、最も光栄の日であった。自分の研究した万葉学の一端が、かしこくも天聴に達したのであった。陳列場でしかじかと言上する時、書物の上をさした一尺ほどの節の多い笹竹は、当日の尊い記念にとわが家に持ち帰り、細長い帙を作っていれ、宝重しておる。》
とあります。

この日は、文部省文芸委員会より万葉集の定本作成を正式に委嘱され、長年からの願いであった編纂作業を開始することが決まった日でもありました。しかし、この行幸の二十日後に明治天皇が崩御され、同月は、信綱にとって大きな転機となりました。

※1…芳賀矢一（一八六七～一九二七）
国文学者。『国文読本』（一八九〇）や『国文学史十講』（一八九九）を刊行し、国文学の起立に力を注ぎました。
※2…上田万年（一八六七～一九三七）
国語学者。西洋の言語研究を紹介し、国語学や国語音韻などの分野を開拓し、国語政策にも携わりました。
※3…千田憲（一八八九～一九七四）
国文学者。信綱とともに『校本万葉集』の編纂に関わりました。
※文中の用字は新体字を用いています。

明治45年7月10日東京帝国大学卒業式　信綱41歳

前列には教師。後列には卒業席が並んでいます。左から5番目に千田憲。向かって前列の右から3番目に信綱、5番目に芳賀矢一、6番目に上田万年が座っています。